

第 2 回 第五期武蔵野市コミュニティ評価委員会

日 時 令和 6 年 7 月 30 日（火）午後 7 時～午後 9 時
場 所 武蔵野公会堂 第 1・第 2 会議室
出席者 委員長、副委員長、小山委員、高橋委員、青木委員、木村委員、毛利委員（名簿順、敬称略）
事務局（馬場市民活動推進課長 ほか 2 名）
欠席者 なし
傍聴者 なし

■ 次第

- 1 開会
- 2 議事
 - （1）コミュニティセンター視察の振り返り
 - （2）アンケート調査報告（速報） ※資料 1、資料 1 の 2
 - （3）意見交換会における視点・議題の確認 ※資料 2、2 の 2、2 の 3
- 3 その他
- 4 閉会

■ 配布資料

- | | |
|----------|---|
| 資料 1 | アンケート調査報告（速報） |
| 資料 1 の 2 | 武蔵野市「地域コミュニティについての市民アンケート調査」報告書（速報版） |
| 資料 2 | コミュニティ評価委員会とコミュニティ協議会との意見交換会について |
| 資料 2 の 2 | 意見交換会行程表 |
| 資料 2 の 3 | コミュニティ評価委員会とコミュニティ協議会との意見交換における議題と自己点検・評価表との対応表 |

1 開会

【委員長】

第2回第五期武蔵野市コミュニティ評価委員会を開会します。ご多忙の中お集まりくださりありがとうございます。早速議事に入りたいと思います。

2 議事

(1) コミュニティセンター視察の振り返り

【委員長】

ではまず、委員の皆さまより、先日のコミュニティセンターの視察を通して感じた感想について、率直なご意見をいただきたいと思います。

【副委員長】

私の場合は、どちらかというと身内の視点で見てしまうところがありました。感じたのは、普段、各コミュニティ協議会が集まって開催する会議などでは結構暗い話をすることもあるのですが、今回のように現場で話をしてもらうと、様々な取り組みについて生き生きと話すのだということでした。これは日常的な活動にはやりがいを感じているけれど、先を考えた時に不安に感じてしまうということなのだろうと思いました。

また、小学生のいるお母さんたちに午前中だけ窓口当番をお願いしているなどの工夫は、コミセンを超えてもっと広がっていくべきではないかと思いました。

【A 委員】

八幡町コミセンの取り組みで、お母さんたちをリクルートするのは、コミセンとお母さんたちの両方にとって有用だと思いました。午前中に窓口に入り、地元という安心感もあると思います。こうした取組みが、他のコミセンにも伝わっていくといいと思いました。

また、本町コミセンで、市外から来る人が多く、館の運営に手がとられてしまうという状況は、結構シリアスな問題だと感じました。地元の自主的な活動や自分たちの楽しいことに力が注げないというジレンマが今後、より課題として深まっていくと感じました。

副委員長もおっしゃっていたとおり、どのコミュニティ協議会も取組みの特長を自信に満ちて話されている姿が印象的で、それぞれが工夫されながら取り組んでいることがよく分かりました。一方で、どこも次の世代がどうなるのかという問題抱えていると感じ、その辺りをどのように考えていくのかは、この委員会でも考えていきたいと思いました。

【B 委員】

コミセンのことを分かっているつもりでしたが、見て驚くことがたくさんありました。学習室は今とても必要とされていることもよく分かりました。それぞれのコミセンによって、ロビーと学習室の利用の仕方も考え方が違うのだなとしみじみ思いました。

【E 委員】

コミセンによって規模やスペースは異なりますが、境南コミセンの団体向けロッカーや学習室など、限られたスペースを運用で工夫して使われているのが見られてよかったと思いました。

また学習室については、特に若者だと思いますが、家では勉強できないがコミセンに行けば勉強できるといった、個人利用のニーズが結構あると思いました。音楽室も同様だと思います。それを踏まえると余計に、個人利用のリピーターをどのように巻き込んでいくか、その仕掛けを考えていかななくてはならないと思いました。

一方で、駅に近かったり、設備が充実していたりするが故に市外の人の利用も多く、地域の施設としてどうなのかという悩みも伺ったので、その辺のバランスが難しい問題と思いました。

個人利用の人や、今まで使っていない人たちをどのように巻き込むかは、今回実施したアンケートも資料として、どのような層が、何をしに、どんな形でコミセンに来ているか、あるいは一步踏み込んでコミセンの運営に関わってもらうためには何が必要なのかなどについて、議論ができると良いと思いました。コミセンとしてその辺についてどう考えているかについては、意見交換の時に伺えたらと思いました。

【D 委員】

コミセンによって、住宅地からの距離や規模、事業の内容や利用者が様々なことを実感しました。今まで私自身はコミセンを利用したことがなく、少し敷居が高くて入りづらいと思っていたのですが、実際にはいろんな取り組みをしていて、自分も利用できそうだなと思いました。地域の方でも、コミセンに入ったことのない方は私と同じように思っている人が結構多いのではないかと思いますので、さらに開かれた形で、情報を外に発信していった方が良いと思いました。

一方で、利用者が地域を超えて広がることによって、地域のコミュニティづくりとしての意味合いが少し薄れてくる気もします。その意味で、コミセンの位置づけなど、いま一度しっかり考えていかないと、コミセンがただサービス提供するだけの場所になってしまいそうだなと思いました。

【C 委員】

コミセン視察で 1 日に回る件数が多すぎて、集中力がもたなかったところがありました。1 日あたりの件数がもう少し少ない方が、しっかり質問や観察ができたと思います。

視察では、それぞれのコミセンで、地域特性によって、年齢層や対象を少し絞った活動もあったように感じました。対象にならない、少数派の人の隠れたニーズをどのように今後拾っていけるかが気になりました。マジョリティは満足しても、マイノリティはいつも「自分達は見落とされた」と感じてしまうのではないかと思います。

また、コミュニティづくりの観点では、児童から、学生、社会人、中年、高齢者まで、年代を繋ぐような取組みができればいいなと思っていたのですが、実際にはそうしたイベントも実現が難しいのかなと感じました。

新しく武蔵野市に入ってきた人は繋がりを求めていると思います。アンケートの結果をみると、やはり決まった人が既に活動していて、新規に入っていくという話が結構出ていました。コミュニティの中に自分が参加したいと思った時に、どうすると気軽に入れるのかを考えて、入りやすいような仕掛けがあるといいと思いました。

【委員長】

私が強く感じたことは、地域や館の特性を考えながら、それぞれのコミセンの活動をなさっているという点で、本当に皆さん現場でよくやっていたらいいことでした。

ただ、なかなか難しいと思うところもいくつかありました。例えば、運営している人の高齢化が進んでいることが如実に分かります。皆さんが注目されたとおり、八幡町コミセンは、特に子育て世代の女性が加わることで、団体の世代交代にかなり動きがあったと思います。八幡町の場合は、建て替えの時からそうしたことを意識して取り組んできたことが大きいと思います。やはり、建て替えなど、何らかのきっかけがないと運営者側が変わっていくことへの難しさがあるのだらうと感じました。

ただ、運営している方たち自身が変わっていないのかというと、変わっていると感じました。10 年くらい前にコミセンの方々にお話を伺った時には、学習室の子ども利用について否定的であり、「子どもはうるさいという声がすごく多いから、学習室は設けられない」という声があるということをよく聞きました。しかし今は、学習室の必要性を感じている方が多く、変化を感じました。高齢化がありながらも子どもへの姿勢が変わっている部分があるということ、もう少しポジティブに評価することも重要だろうと、今回改めて感じました。

もう 1 点の難しさは、駅に近いなど、利便性の高いコミセンが実質的に貸館になってしまっているところです。市は公共施設として、在住の他に在勤・在学

の方にも向けて環境を整備していますが、ただ無料で使えるからという理由だけで使用しているサークル等にまで支援をし続けなければならないのかについては、疑問に思います。そうした団体のためにコミュニティ協議会がとても忙しくなっているとすれば、本末転倒だと思います。この貸館化してしまう問題を、委員会としてどのように受け止めていくかは、重要な課題ではないかと改めて考えています。

最後にもう 1 点、現在、コミセンの改修工事が次々に進むなかで、リフォームに対してコミュニティ協議会の皆さんが、「こうやってほしかったのに」と言いながらも、非常にポジティブに、新しく変わるきっかけとして受け止めているように強く感じました。八幡町コミセンほど大きく変えるのは難しくても、施設の改修は、皆さんが自ら何か新しいことについて考え直すきっかけにもなるので、面白いと思います。例えば大規模改修に加えて、小さな改修工事を行うようにして、一緒に考えるきっかけを作るのもいいのだろうと思います。事務局は大変ですが、改修すると要望がたくさん出て、今何が必要なのか、お互いがコミュニケーションを取るきっかけにもなると思います。改修をツールとして使って、自分たちを見つめなおしたり、コミュニケーションを促したりすることもできると思います。

では、ここまで皆さんからご意見をいただきましたが、皆様の意見のなかで、さらに聞いてみたいことなどございますか。もしくは事務局から、もしございましたらお願いします。

【事務局】

連日長時間にわたり視察をしていただきありがとうございました。

ハード面はコミセンごとに大きく異なり、ソフトの面でも、イベントや事業をはじめ、活動内容はコミセンごとに違います。また、年齢や性別など、コミュニティ協議会自体の構成もコミュニティ協議会ごとに違っており、視察を通じてそうした状況を感じていただけたと思います。

全体としてはやはり、特に若い世代の新しい担い手をどのように呼び込めるかが共通の悩みで、広報や組織運営をどのように工夫していけるかが課題になっているので、その辺りも次の意見交換会の中で話ができればと思います。

【委員長】

はい、ありがとうございます。その他、ございますか。

【A 委員】

委員長から改修工事のポジティブな面のお話がありましたが、一方で休館することへのネガティブな面も印象にあります。コロナによる休館からの復活が難しかったというお話をいくつかの館から伺いました。

また、事務局の職員が、これだけの数のコミセンがあるなかで、各コミセンの現場の状況をよく把握していて、すごいことだと思いました。どのコミセンでも「実はこういうことがある」などと話されていて、コミュニティ協議会と事務局が二人三脚で取り組んでいるという印象を受けました。外部の視点から一応この場でお伝えします。

【委員長】

今、A委員からもあったように、武蔵野市の職員はよく現場の事情を把握していると思います。やれば簡単にできる新しいことというより、日々コミュニケーションを取り組みながら共に取り組んでいることが分かりました。

では、コミセンの施設の振り返りはここまでといたします。コミセン視察では、コミセンのハード面や運営の実態など、様々なものを見てきました。次回の意見交換会では、協議会の運営をされている方々の様々なご意見を伺うこととなりますので、両方の側面を合わせて今後考えていきたいと思います。コミセン視察で感じたことを振り返りつつ、意見交換会に向けては、ぜひ、聞きたいことなどをお考えいただければと思います。

(2) アンケート調査報告（速報）

① 無作為抽出アンケート

【事務局】 無作為抽出アンケートの概要の説明

【委員長】

アンケートは、無作為抽出の一般市民に対するアンケートと、コミセン利用者に対するアンケートの2種類です。まず事務局からは、前者の無作為抽出の市民アンケートについての説明でした。また、これは暫定的な数字で、大まかな傾向は多分変わりませんが、数字は変わる見込みということです。

それでは、無作為抽出アンケートについて何かございますか。

【C委員】

前回のアンケート調査結果では、自由回答の文量が多くあって、非常に参考になる意見がありました。今回は少ないように思ったのですが、昨年度と同じくらい回答があったのでしょうか。

【事務局】

今回資料でお示ししたのは、一部抜粋です。自由記述も含めた報告書は第3回委員会でお示ししたいと思います。

【事務局】

自由記述の文量は、若干少ない程度で、前回とほぼ同量の見込みです。

【副委員長】

77%の人がコミセンを知っているという結果は、私の実感より少し上でした。良いことなので良いのですが、市内を歩いていて、コミセンの場所を訪ねても知らないと答える人が多い認識でいました。

また、アンケートの回答をみると、コミセンは災害時の防災拠点と認識している人が34%いるようです。実際には防災拠点にはならないので、こうしたことを市民に丁寧に伝えていかないといけないということが、客観的なデータとして分かりました。

【事務局】

コミセンの認知度について77パーセントという数字は前回の調査より若干増えています。また、コミセンを知っている方のなかで、地域住民がコミセンを運営していることも知っているかについては、前回のクロス集計では8割程度の方が知っていると回答していて、今回もおそらく同様の結果になるのではないかと考えています。今後、よりコミセンの認知度を高めていくために、何ができるかを考えていかなければいけないと思っています。

また、防災拠点という選択肢は、今回の調査から新たに追加しました。コミセンは避難所ではないのですが、災害時の一定の役割を担っているので、市民にどのように関心と関わりを持ってもらえるかが課題です。

【事務局】

災害時の役割について補足すると、地域防災計画上、コミセンは「災害時地域支え合いステーション」として、避難所を補完する役割を担っています。武蔵野市の場合は在宅避難が原則になっていますが、避難所だけで対応できない部分を補完するという位置づけです。

具体的には、地域への情報発信、在宅避難者への物資の配給と相談、福祉避難室の開設といった役割が期待されています。また場合によっては、学校避難所が地理的に遠い住民向けの臨時避難室の開設や、帰宅困難者の方の一時滞在受け入れ、また学校避難所で収容しきれない場合の臨時避難室としての役割が期待されています。

【副委員長】

今、コミュニティ協議会では、災害時に向けた手引き等の準備をしています。要するに、正しい情報を市民に伝えることが大切だと思っていて、災害時にコミセンに、市内の34%の人が来ると思うと少し怖いです。

また、コミセンの認知度が上がったのは、複数のコミセンが新型コロナワクチン接種会場となっていたことも関係あるのかなという気がします。

【A委員】

今回のアンケートから、QRコードで回答できるようになりました。若い方の回答は増えていますか。今回コミセンをまわって、実はコミセンは、子ども

たちへの認知度は結構高いのではないかと思います。今回の無作為抽出アンケートでは、18歳ではなく15歳から回答できるようにもしたので、その辺りについて伺いたいです。

加えて、副委員長のお話への感想ですが、「地域コミュニティ活動」とは何かについて、市民がどのように捉えられているのか気になりました。市や日々コミュニティづくりに取り組んでいる方々と、一般市民の間にギャップがある気がします。例えば、地域に求められていることは、防災や防犯の活動というのが、全体の傾向だと思うのですが、コミセンでは防犯が主な活動というわけではなく、そうした点にギャップがうまれてきているのではないかと思います。この辺りを丁寧に整理しながら情報発信していくことや、時には考え直すことも必要なのではないかと思います。

【E 委員】

(3)の⑥の「現在、地域コミュニティ活動に参加していない理由」では「参加のきっかけがない」、「生活が忙しく時間がない」が主な回答となっており、⑧の「今後参加したい地域コミュニティ活動の団体」では「有志・趣味・自己啓発等のサークル・グループ」が高い割合となっています。⑨の「地域コミュニティ活動に参加しやすくなるためにあるとよい条件」の主な回答も、既に用意されたものへの参加が前提にあるような印象を受けました。地域コミュニティ活動とは何かという話になると思いますが、主体的に一步活動に踏み込んでもらうための仕掛けについて、考えていかななくてはならないと思います。

【委員長】

この点は重要だと思います。日々活動されている方にとっての地域コミュニティはあまりにも理想が高すぎて、趣味のサークルなどを思い浮かべる一般の方にとって、自分とは縁遠いものになってしまうことがあると思います。

今回、アンケートの結果をさらに分析してみました。コミセンの場所の認知について、地域別で分かるように絵にしました。東高西低と、西の方は認知度が低く、東の方は比較的認知度が高いことが分かりました。考えられる理由としては、コミセンの場所的な問題のほか、西の方には大規模なマンションが多く、若い人が多いことがあるのかなと思います。

ちなみに、運営の認知度についても同様の傾向です。「武蔵野市これからの地域コミュニティ検討委員会」の検討の際に、転入者に最寄りのコミセンを案内するようにしてくださいと市にお願いをしました。このお願いがどれほど徹底されているかは分かりませんが、その影響は少しあると思います。あとは副委員長ご指摘のとおり、ワクチン接種会場となった効果だと思います。強制的に足を運ぶ機会となるワクチン接種は、選挙に比べても比較的行きやすいし効

果があったのだと思います。とはいえ、地域ごとに違いがあることは、対策を考える材料になるとも思っています。

さらに詳しい分析も行いました。興味深いのは、地域を良くする活動を尋ねる質問で、産業振興、文化芸術、スポーツ、国際交流、歴史・伝統などと回答した人は、実際に地域の活動にあまり関わろうとしていない人たちとなっていることです。地域に関心はあっても、それはどちらかというところ、個人的な活動としての地域コミュニティ活動に近い発想であって、地域の課題解決や住民交流がしたいという発想とは距離があるのだと思います。地域に関心のある人のなかでも違いがあるかもしれないと思っており、その背景には、先ほどご指摘のあったとおり、地域コミュニティ活動に対してもイメージの違いがあるのかもしれないと思っています。なお、今回の分析では、全ての人間を対象に分析したかったので、コミセンにどう関わるかといった項目は考慮していません。

また、個人的にとっても興味深く感じたのは、一生懸命地域の活動に参加している人の属性はよく分からないということです。例えば、コミセンを全く知らない、地域に関わる気もない人の属性は分かります。想像いただいたとおり、長く住む気がない人たちであり、居住年数が短い人、賃貸に住んでいる人、単身の人です。長く住む気がない人にどれだけ一生懸命アプローチをしても難しいです。唯一興味深いのは、八幡町の人が「地域と関わりたくない」と回答する人が多い割に、地域のことを考えたいと思っている人が多いことです。一方で、西久保は都市空間に住んでいる人の方が多い印象があります。

私たちが考えるような地域やコミュニティ活動に対する理解が、人によって大きく分けて4象限くらいに変わってきていると思います。一見すると地域との関わりにコミットしているように見えるグループも、どちらかというところ、地域の課題を解決したいというよりは、個人的な課題を地域とつなげることを通して、解決していきたいと思う方が多いように思います。それは決して悪いことではないけども、そういった人たちへのアプローチも考える必要も生じてきていると思います。地域との関わりが、単に増えることはとても大事ですが、それだけではなく、その質をどのように考えるか、そして、どのあたりに大事なターゲットがあるのかなどを一緒に考えていければと思います。

おそらく、この無作為抽出アンケートは、様々な分析や解釈の方法があるので、まずはしっかりとした記述統計を出して、それを土台にして、いろんな形で分析したものをしながら、委員の皆さんの感覚を大切に、様々な議論ができればと思っています。

では、無作為抽出アンケートについては、以上でよろしいでしょうか。引き続き、利用者アンケートについて事務局より説明をお願いします。

② 利用者アンケート

【事務局】 利用者アンケートの概要の説明

【委員長】

まだ利用者アンケートも引き続き集計中です。結果はコミュニティ協議会の皆さまに共有すべきと思っていますが、会議の冒頭に説明があったとおり、この委員会および利用者アンケートの趣旨はコミュニティ協議会の業績評価ではないので、結果の最終的な取扱いについても協議していきたいと思います。

では、この速報値について、あるいは形式等について、皆さまからご意見やご質問はございますか。

【C委員】

利用者アンケートについて、アンケートへ協力してくれた方へのフィードバックは考えていますか。

【事務局】

原則はアンケート結果の公表をもって、回答者へのフィードバックとする予定です。

【C委員】

せっかく関心をもっていただいてアンケートに協力くださった方たちに、何らかの形でフィードバックをしてほしいと思います。

また今回、自由回答にもたくさんの回答があり「こうしたことがやりたい」など、様々な記載がありました。せっかくやりたいと思って書かれた方に無反応であるのはとてももったいないと思います。全員無記名ですから難しいとは思いますが、意見に対する対応やバックアップに関する何らかのメッセージをフィードバックしていくと良いと思います。

【事務局】

特に自由回答の部分は、コミセンの運営にも参考になるものが多いので、少なくとも各コミュニティ協議会には共有したいと思います。また、意見に対する回答についてはボリュームや内容に応じて考えたいと思います。

【C委員】

フィードバックする際には、各コミュニティ協議会の運営委員の方の考えも尊重して回答する必要があると思いますが、自由回答で記載された全ての意見に対して、回答するようなことは私も考えていません。ただ、自由回答に「こういうことがしたい」と書いた方に、他にも同じ志を持った方がいるということが伝わるようなフィードバックをしてもらいたいと考えています。

【委員長】

自由記述を報告書において詳細に分析する必要はないと思いますので、利用者アンケートの結果はぜひコミュニティ協議会の方に共有していただければと思います。

C委員がおっしゃるとおり、こうしたアンケートの回答がその後何に使われたのか分からないことはよくあることです。せめて、アンケートで分かったことを伝えていくことが大切だと思います。フィードバックがあることで、次のアンケートに協力しようと思ってもらえることもありますので、今後どのような形でフィードバックできるのか、さらに各コミュニティ協議会に対して個別のフィードバックをするのかなど、検討が必要かと思います。

では、他の点でも結構ですので、ご意見ございますか。

【A委員】

どのような立場でアンケートに回答したかが、人によって異なると思いました。例えば、行政に対するアンケートでは結構厳しい意見を寄せることが多いと思います。大学の授業評価アンケートでも、ロボットに対して書いているかのように、本当に厳しい意見を寄せてくる学生がいるのですが、コミセンを誰が運営しているかを分かっているかどうかによって、意見の言い方も変わってくるのかなと思います。寄せられた意見をそのまま受け止めると少し辛くなってしまう、あるいは普段の能力が全て否定されてしまうような意見が書かれていることも考えられると思うので、どのように受け止めればいいのかということも含めて、どのようにコミュニティ協議会の方々に伝えるかを考えることも必要なのではないかと思います。

それを踏まえてのお話なのですが、コミセンごとの属性、例えば市民外の利用者が多かったり、利用者に男性が多かったりなど、館ごとの特徴を分類しながら今後分析してみることも大切なのではないかと思います。

【委員長】

今、A委員がおっしゃったように、利用者アンケートの結果は、全館まとめて公表することはしますが、実際にはあまり意味がないと思います。コミセンごとの成績評価のようにならないよう留意しつつ、館ごとの立地などの特徴を委員会として適切に解釈しながら、結果の数値を読み解いていけたらと思います。

他に委員の皆さまからご意見ございますか。では、続いて議事の(3)意見交換会にける視点・議題の確認に移りたいと思います。

(3) 意見交換会における視点・議題の確認

【事務局】 資料2、資料2の2、資料2の3について説明

【委員長】

ただいま、9月13日と14日に予定されている各コミュニティ協議会との意見交換会についての案をご説明がありました。案についてご意見ございますか。

【C委員】

自己点検評価表の評価項目は、コミュニティ協議会の運営委員が自主的につくったものですか。

【事務局】

コミュニティ研究連絡会において評価項目を確認し、各コミュニティ協議会に持ち帰って回答を作成いただいています。

【C委員】

評価項目は市が作成していると思うのですが、ボランティアが手弁当で運営していることについて、尋ね方が厳しいような気がしました。意見交換会では、コミュニティ協議会として今後のコミュニティ活動をどうしていきたいのか、市にどのような支援をしてほしいのかを自由に話してもらえるような内容にできたら良いのではないかと感じました。コミュニティ協議会の方は志が高くてそういったことにはならないのだと思いますが、一般的には、ボランティアで活動していることについて自己評価を求められて、市に結果を提出しなくてはならないという状況は辛いと思いました。

【事務局】

自己点検評価が始まった経緯について、補足説明をします。まず、コミュニティ評価委員会は平成15年から始まりましたが、当初はかなり細かい調査票をもとに評価をしていて、コミュニティ協議会にとっても委員会にとっても負担感が大きいものでした。こうした負担の大きい評価活動を毎年実施する必要はないのではないか、コミュニティ協議会が自主的に振り返って次の活動にいかしていくことが大切だということになり、平成18年からはこの自己点検評価をベースにするようになりました。それに伴ってコミュニティ評価委員会も5年に1回など、間隔を空けて開催することになりました。

自己点検評価の項目はコミュニティ研究連絡会のなかでコミュニティ協議会の皆さんの意見を聞きながら項目立てしたものです。

現在は、コミュニティ協議会ごとの活動の振り返りの機会としているほか、コミュニティ研究連絡会のなかで、それぞれのいいところや課題を共有して、話し合っていくための材料にするという位置づけで実施されています。

【C委員】

今のお話を踏まえるとなおのこと、自己点検評価についてはコミュニティ協議会に委ねていいのではないかと感じます。ただ、私は第三者で分からないところがあります。副委員長はどう思われますか。

【副委員長】

自己点検評価活動は毎年実施していますが、毎年「また今年もやるの」という声が上がります。それは当然のことと思います。ただ、やはり1年に1度振り返る機会がないとどうしても惰性に流れてしまうことがあると思うし、経験値が長くなればなるほど、抜けが出ると思います。

とても青木さんの優しい意見だし、分かるのですが、自主三原則でありながら、市の建物を指定管理者として運営していて、そして地域住民は、半公共的な施設として集まっているという状態なので、とても難しいのです。ボランティアで取り組んでいる人の責任と自覚というのは、どこかで自分で自分たちを律していけないと、どうしてもだらだらとなってしまうと思います。そのなかで編み出してきた方法なのだと思います。コミュニティ協議会として、役所から聞かれていると思うと腹も立ちますが、自分たちが運営しているコミセンの点検項目だと思えば受け止められるように思います。

【E 委員】

このコミュニティ評価委員会が最終的にどのような形で報告をまとめるかにも関わる話ですが、意見交換会では、自己点検評価表では見えてこないような、地域特性として困っていることなどの想いを聞くことに時間をかけられたらと思います。

また、行程表を見て移動時間がとてももったいないように感じられました。お話をきく場所はとても大切だと思うのですが、移動時間を少なくできればもう少しコミュニティ協議会の方のお話が聞けると思いました。

【委員長】

意見交換会に向けては、自己点検評価表の結果を事前資料として委員に共有いただければと思います。意見交換会では、その結果について説明してもらうという訳ではなく、なぜかCだった場合や、あるいはAと書いているけど自分たちとしてはトップSである場合などについて、まずコミュニティ協議会の方にご説明いただいて、大きい項目として「住民参加の運営のところについて特出ししたいところはありますか」など問いかけながら、そこから生まれる話や、逆に自己点検評価表には反映できていない想いなどについてお話ができればと思います。

話す時になにも土台がないと難しいので、意見交換会は自己点検評価票を土台にやるけれど、その内容は既に委員には共有済みであることをコミュニティ協議会には伝えていただければと思います。

時間については、来てもらうか、行くかという話だと思います。個人的な願いとしては、対決姿勢みたいな形で向かい合って話すのではなく、丸く座りたいという思いがあります。コミュニティ協議会の希望に応じて、コミセンで実施するところと、市役所等で実施するところがあっても良いのではないかと思います。

います。ただ、この暑いなかコミュニティ協議会の方々に市役所までお越しいただくのはつらい場合もありますので、つらくなかったら来てくださいという形で、少しでも流動性を持たせられればと思います。

ちなみに当日の運営の主体はこの委員会ですよろしいのでしょうか。

【事務局】

評価委員会の主体で、進行は委員長をお願いします。

【委員長】

これまで長期計画の策定など、いろんな方とお話しして思うことなのですが、冒頭に説明をしたり、自己紹介をしてしまったりすると意見交換の時間がなくなってしまうので、お互いの名前が分かる資料をご用意いただくなど、工夫をお願いできればと思います。

40分という限られた時間を有効に活用して中身のあるお話ができるように、よろしくお願いします。

【A委員】

先日のコミセン視察の際も、委員への共有だけではもったいないように思いました。コミュニティ協議会によっては嫌と思うかもしれませんが、今回はもう少しオープンにして、他のコミセンはどんなことで困っているんだろうなど、お互いに聞き合えるような形でもいいのではないかと考えています。ただ、移動が必要となるとそれは難しいかもしれないと思いました。

【委員長】

前回の意見交換会の際は、コミュニティ協議会の方に来ていただいたと思うのですが、今回の意見交換会は公開されるのでしょうか。

【事務局】

一般市民への公開はしておらず、同じ会場にする場合には前後のコミュニティ協議会の方などで希望があれば傍聴できるという形を想定しています。

【副委員長】

今回は2つほどコミュニティ協議会の方が部屋に入り、順に話しをしていたような気がします。

【委員長】

委員会としては、見ていただくことに何の差し支えもないので、例えば、前後のコミュニティ協議会などで他のコミュニティ協議会の様子を見てみたいという希望があれば、傍聴いただいても良いと思います。全ての協議会の様子を傍聴いただくのはあまりにも時間がもったいないですが、おそらくやはり、各コミュニティ協議会で似たような課題をもっていて、他のコミュニティ協議会ではどうしているのだろうと気になられると思います。

ただ、移動については難しいところもあると思いますので、委員会としては柔軟に対応していければと思います。

他に委員の皆さまより、なにかございますか。

【C 委員】

コミュニティづくりの定義というか、具体的にはどのようなテーマがあるのでしょうか。例えば、生活していく上で情報を共有する場であったり、今活動が活発な同好会のようなものであったり、さまざまな形があると思います。各コミセンで、それぞれへの比重のかけ方は違うとしても、ある程度あらゆるコミュニティ活動を包括している状態であった方が良いのではないかと考えています。

先ほど委員長がおっしゃったとおり、評価項目に沿った細かい話をするよりも、コミュニティ活動が活発化して、周囲のなかで人間関係ができて誰も孤立せずに済むような世の中に向けて、ここの地域ではこういった取組みを主体的に進めようなどといった話が意見交換会のなかで話せたらと思います。なかでも、日々の取組みのなかで困っていることや、市に対しての要望などを伝えてもらえるとより意義のある機会になるのではないかと考えています。

【委員長】

コミュニティづくりとはなにかを突き詰めるととても難しい話だと思いますが、武蔵野市の場合は、そもそもコミュニティ構想があり、都市におけるコミュニティのあり方についての考えを伝えています。非常に難しいと思うのは、地域のなかで人々が孤立しないようなコミュニティのあり方は、実はあまりコミュニティ構想に近い発想ではないことです。それはどちらかというと、近年の福祉コミュニティのあり方の話で出てくる話です。つまり、コミュニティという言葉は非常にいろんな場面で使われていて、だからこそ魅力的な言葉であり、また、何を指しているか分からない言葉だと思います。

先ほどお話のあった趣味の活動も、その趣味の活動に関心のない人にとってはあまり意味のないものですが、関心のある人にとっては趣味を媒介として地域を超える人々がつながる空間になります。ここでさらに難しいのは、コミセンでは、地域のコミュニティについて考えなくてはならないことだと思います。これは市政上の課題でもあるし、初期のコミュニティ構想上の課題でもあると思います。ただ福祉だけでも、趣味だけでも、繋がるきっかけだけのコミュニティ活動でもいいという点と、地域という物理的な側面を媒介としつつ自主的につながるという、とても難しいチャレンジが求められているということだと思います。そもそもこれは達成できないような目標なので、達成できないことを理解しつつ、どうしたら近づけるかという悩みを共有していくことを考えていく方がいいのではないかと考えています。

コミュニティ構想はとても大きな話ですが、コミュニティ活動の定義の話を始めると厄介なので、地域の課題を市民の自主的な判断によって解決していくことについて、どこまでができていて、どこまでができていないのかを一緒に考えていければと思います。特にコミュニティ協議会はコミセンを運営するだけではなく、本当は様々な地域の人々がコミセンを中心に集いながら繋がっていくという発想で、意見交換会でも議論ができればと思います。逆に、それ以外の議論がたくさん出てくる場合は、少し目線を合わせる形で誘導する必要があると思っています。

ただ C 委員のご指摘の点はとても重要で、皆さんが感じる今のコミュニティの課題は孤立や貧困、子どもの居場所の問題だと思うので、そうした問題についても一緒に考えていければと思います。

【A 委員】

やはり今、地域活動されている方々も、それぞれ異なる思いで取り組んでいらっしゃると思います。先ほど委員長がおっしゃっていたように、コミュニティは 10 年前とは変わってきていると思うのですが、それもまたきっと、現場の方たちの活動から捉えなおしていけることではないかと感じます。C 委員もおっしゃっていたように、対話のなかでいいものを共有するなど、定義から考えることより、現場から考えていくことを重視した方がいいのではないかと思います。

【委員長】

皆さま、他にいかがでしょうか。意見交換会について、なんとなくのイメージは共有できたかと思いますので、移動等については事務局でコミュニティ協議会の要望を踏まえながら調整していただければと思います。

それでは 3 のその他について、事務局より何かございましたらお願いいたします。

3 その他

【事務局】次回委員会日程の調整方法について連絡

4 閉会

【委員長】

ではこれで全ての議事が終了しましたので、第 2 回第五期コミュニティ評価委員会を終了します。皆さま、ありがとうございました。